法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

根岸党と江戸風文学の隆盛

高橋，寿美子

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies
(巻 / Volume)
60
(開始ページ / Start Page)
354
(終了ページ / End Page)
348
(発行年 / Year)
2008-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003124

Hosei University Repository

根岸党と江戸風文学の隆盛

国際日本学インスティテュート
人文科学研究科　日本文学専攻
博士後期課程三年　高橋　寿美子

一

根岸党とは、明治二十年代に当時の東京根岸とその周辺に居住した文人の一団を指す。文士や画家を中心とする集団ではあるが、文学上もしくは芸術上の結社的意味を持つものではなく、相互の住宅の地理的条件や共通の趣味を介した交遊から生れた集団であった。明治二十年前後より漸次形成された根岸党は、次第に文壇の一派として認識されるようになり、「根岸派」とも呼ばれるようになる。

根岸党の構成員は時期によって出入りがあり、また証言者によっても異同があるが、おおよそ以下のようになる。現代の意味でいう文学寄りの人物としては、幸堂得知（天保一四―大正二年）・饗庭篁村（安政二―大正一一年）・須藤南翠（安政四―大正九年）・宮崎三昧（安政六―大正八年）・森田思軒（文久元―明治三〇年）・高橋太華（文久三―昭和二二年）・関根只好（文久三―大正一二年）・中西梅花（慶応二―明治三一年）・幸田露伴（慶応三―昭和二二年）、美術寄りの人物として、川崎千虎（天保六―明治三五年）・久保田米僊（嘉永五―明治三五年）・岡倉天心（文久二―大正二年）・富岡永洗（元治元―明治三八年）がおり、他に実業寄りの人物として、高橋健三（安政二―明治三一年）・楢崎海運（万延元頃―明治三三年）・藤田隆三郎（生年、没年不詳）などが挙げられる。「〜寄りの人物」としたのは、その活動や業績が多岐にわたり、現在の概念で「作家」や「画家」、「実業家」と明確に区別することが困難である人物が多く含まれるためである。なお、党員には美術関係者も多いが、管見では「根岸党」もしくは「根岸派」が、日本画壇の一派として認識されたという資料はなく、日本近代美術史研究においても、その研究は存在しない。

根岸党の構成員のうち、幸田露伴と岡倉天心とを除いては、現在では忘れ去られている人物といってよく、個人全集が整備されているのもこの二人のみである。また構成員の知名度に比例して、集団としての根岸党の存在も、殆んど知られていないのが現状である。例えば、講談社版『日本近代文学大事典』全六巻（昭和五二〜五三年）は、日本近代文学に関する辞書・事典では現在のところ最も情報量の多いものであるが、同書には「根岸党」もしくは「根岸派」の項がないということが、その傍証になるであろう。

筆者は、現在では日本近代文学研究者の間においてすら知名度の低い、根岸党の再評価を試みたいと考えている。先行研究が極めて少ない根岸党には様々なアプローチ方法が考えられるが、ここでは彼らの文学について論ずる。ただし、本稿ではこれまでのいくつかの研究のように、党員による個々の著作を取り上げ分析することはせず、根岸党文学の隆盛という現象そのものを研究対象とする。それが如何なるものであったのかを明らかにし、さらにはその文化的・社会的背景にまで言及したい。

二

現在一般に流通している「日本近代文学史」において、「根岸党」もしくは「根

Hosei University Repository

岸派」の名称はもちろん、幸田露伴以外の根岸党の文士たちの名を見ることは皆無である。その一方で、明治二十二、三年頃から二十七、八年頃を指す「紅露時代」という時代区分ならば多くの文学史で採用されており、近代文学を学ぶ者は見聞きしたことがあるだろう。露伴と、硯友社を率いた尾崎紅葉とは、いずれも明治二十二年に発表した元禄調の小説によって急速に人気を得、同時期に読売新聞社に入社し、読者の人気を二分したと言われている。確かにそれは間違いではない。しかしながら、実際に同時代における文学作品の出版状況をみるならば、「紅露時代」はまた、根岸党と硯友社とによる、「根硯時代」あるいは「硯根時代」とも言うべき時期であることが分かるのである。

現在では忘れ去られた根岸党の文士たちであるが、当時の隆盛は華々しいものであった。明治二十二年七月から翌年十一月にかけて、饗庭篁村の小説・随筆・紀行を集めた著作集『むら竹』が春陽堂から刊行された。篁村は根岸党のリーダーと目された人物であるが、二十巻にもおよぶ個人著作集の刊行は、日本の出版史上においては前代未聞のことであった。さらに、二十二年十一月発行の『国民之友』「時事」欄には、「篁村宗」と題して「言文一致の流行稍熄んで、篁村宗将に弘布せられんとす、篁村宗とは何ぞや、饗庭篁村先生の文脈是なり」という短評が掲載されており、その当時、篁村流の文学作品が如何に人気を博したかが察せられるであろう。彼は、当時の人気に比較して後の文学史で最も冷遇された人物の一人といってよいかも知れない。ちなみに幸田露伴は独学の人で生涯師をとることはなかったが、その著作の中で「先生」という敬称で呼んでいるのは篁村だけである。[1]

根岸党には篁村を始めとして、須藤南翠・幸堂得知・森田思軒など、当時の文壇における大家が勢ぞろいしていた。また文士以外でも、画家の富岡永洗・久保田米僊による口絵や挿絵が、多くの新聞・雑誌に掲載され人気を博していた。資料1は、根岸党員三名以上が関わった雑誌・新聞や、文学叢書・合著集である。根岸党が当時の文壇で如何に隆盛を誇ったのか、同資料によりその一端を示すことが出来るだろう。

現在把握している限りにおいて、集団としての根岸党に外部から言及された新聞・雑誌の記事として最も早いものは、明治二十四年五月発行の『日本評論』に掲載されたものである。同誌にはその後、第三十四号に至る迄、ほぼ毎号にわたって根岸党に関する記事が掲載されているが、それらはすべて「文学一斑」欄に掲載されている。つまり、作家だけで構成された集団でもなく、文学上の結社でもなかった根岸党が、遅くともその頃までには文壇の一派として認識されていたということだ。上記に述べたような党員たちの隆々たる活躍は、根岸党が文壇の有力な一派として認識されるようになる要因となったであろう。

資料1

一、新聞・雑誌の部

○第一期『新小説』

明治二十二年一月に文学書肆としての雄飛をねらった春陽堂主人の和田篤太郎が親しかった須藤南翠と計画し、創刊された小説中心の文芸雑誌。編集兼発行者は南翠で、第五巻からは饗庭篁村・森田思軒らも共に編集主任となった。上記三人の根岸党員の他、石橋忍月・條野採菊・前田香雪・山田美妙・依田学海など、全十四名から成る春陽堂内の「同好会」を発行所とした。山崎安雄『春陽堂物語』(昭和四四年五月、春陽堂書店)によれば、南翠・篁村・思軒らは当時新聞編集などで多忙の身であったため、原稿の取り集めや出版事務の一切は春陽堂側が行ったという。

○『少年園』

明治二十一年十一月創刊の児童雑誌で、少年向け総合雑誌の嚆矢とされる。主幹の山県悌三郎により、高橋太華が編集長に迎えられた。誌上には太華自身のお伽話や史伝類なども多く掲載されているが、『少年園』の巻頭論文のうち「大部分は、其の筆致よりして、太華山人の手に成れるもの多きに居り」という木村小舟の証言があり(『少年文学史明治編』上巻、昭和一七年七月、童話春秋社)、無著名のものも相当数にのぼると推定できる。饗庭篁村・森田思軒・宮崎三昧・幸田露伴らも小説や伝記などを寄稿している。

○『小国民』

明治二十二年七月に創刊された学齢館発行の児童雑誌。『明治事物起源』の著者として知られる編集長の石井研堂は高橋太華と同郷で、小学校以来の同窓・友人であった。その関係で、太華は『少年園』の競合誌である同誌の編集をも監督することになった。太華自身や幸堂得知の作の他、幸田露伴は常連執筆者

Hosei University Repository

といってよいほど多くの作を寄稿している。また同誌上には富岡永洗の挿絵が多く掲載されている。

○『歌舞伎新報』

明治十二年創刊の歌舞伎新報社より発行の演劇雑誌。「明治以降に発行された類誌中で、その内容の充実さからも、また永続の誌齢からも、先ず屈指の演劇雑誌」（岡野他家夫『近代日本名著解題』、昭和三七年三月、有明書房）で、二十五年頃から宮崎三昧・幸堂得知らも編集にあたり、幸田露伴もそれに参加している。二十八年からは関根只好が編集主任となり、その前後から、饗庭篁村などの「一流文人」（同前）が執筆陣に加わり内容もいよいよ充実したとされる。同誌には他に、二葉亭四迷・坪内逍遙・森鷗外・尾崎紅葉らも寄稿している。

根岸党には劇通と目される人物が多かった。『東京朝日新聞』には、明治二十五年三月十日から十八日にかけて、饗庭篁村・幸堂得知・須藤南翠・森田思軒・宮崎三昧・関根只好・久保田米僊の七名で、「深野座初春狂言評判記」という衆議評を連載している。同評について『早稲田文学』（第一二号、明治二五年三月）には、「その人の性癖まで見えてをかしかりき」と記されている。

○『めさまし草』

明治二十九年一月発行の文芸雑誌。樋口一葉の「みつの上日記」には、斎藤緑雨の言として、森鷗外・幸田露伴・斎藤緑雨が「連帯責任」で起した雑誌と記されている。同誌上には、二十九年八月から三十一年九月にかけて、上記三人に依田学海・尾崎紅葉の他、根岸党員の饗庭篁村・森田思軒（途中病死）を加え、合評「雲中語」が連載されている。別に、三十年五月から三十一年四月には、さらに三木竹二を加えて和漢古典を批評・考証した「標新領異録」が掲載されている。

二、叢書・合著集の部

○『新著百種』

明治二十二年四月から二十四年八月にかけて、吉岡書籍店から刊行された小説叢書。百二頁、全十八冊。定期刊行物のかたちを採用した小説叢書の先駆的なもので、発刊当時は「一号読切りの雑誌」（『日本近代文学大事典』第六巻、昭和五三年三月、講談社）といわれていた。第二編が饗庭篁村『掘出しもの』、第五編が幸田露伴『風流仏』、第七編が宮崎三昧『松花録』、第十二編は再び露伴『真言秘密聖天様』となっている。

○『新作十二番』

明治二十三年四月から二十四年十二月にかけて、春陽堂から刊行された小説叢書。三十九丁、全八冊。「現今小説家の巨擘を以て目せらるる作家八人の新作傑作集」（前掲の『日本近代文学大事典』第六巻）で、半紙木版摺り、彩色表紙、口絵入の美本。第一編が饗庭篁村『勝関』、第四編が宮崎三昧『かつら姫』、第八編は幸堂得知『浦島次郎蓬莱噺』となっている。

○『国民小説』

明治二十三年十月、民友社から刊行された小説叢書。二百九十三頁、十作品収録。雑誌『国民之友』に掲載された作品を集めたもので、明治二十年代研究に必須の叢書とされる（前掲の『日本近代文学大事典』第六巻）。幸田露伴「一口剣」、饗庭篁村「良夜」、須藤南翠「新編破魔弓」、森田思軒訳「大東号航海日記」が収録されている。

○『聚芳十種』

明治二十三年十二月から二十五年四月にかけて、春陽堂から刊行された小説叢書。二百八頁、全十冊。明治二十年代の文壇大家の中編小説を一冊読切りのかたちで刊行したものとされる。第四編が須藤南翠『臥待月』、第七編が宮崎三昧『恋の重荷』、第九編が幸堂得知『さゝきげん』、第十編が饗庭篁村『雪達摩』となっている。

○『少年文学』

明治二十四年一月から二十七年十一月にかけて、博文館から刊行された児童文学叢書。百五十三頁、全三十二冊。明治期で最初の児童読物シリーズで、「童話」、「少年・伝記小説」、「史伝」などに分かれており、和装木版色摺りの表紙も人気を呼んだ。第七編は幸田露伴『二宮尊徳翁』、第十編は宮崎三昧編『親の恩』、第十五編は高橋太華『河村瑞賢』、第十七編に再び太華『太閤秀吉』、第二十編に幸堂得知『みちのく長者』、第二十一編に太華『新太郎少将』、第二十五編は幸田露伴『日蓮上人』となっている。

○『後の月かげ』

明治二十四年十二月、濃尾の震災義捐の目的で春陽堂から刊行されたもの。百九十六頁、二十一作品収録。発起者は幸堂得知、その補助に宮崎三昧がつき、

Hosei University Repository

口絵・挿絵を富岡永洗、題字は森田思軒が担当した。同書刊行には、春陽堂主人の和田篤太郎が岐阜県出身であることも関係したといい、一千部の売上純益金を被災者に贈るというものであった。明治二十五年一月九日の『都新聞』には、その頁数にして定価三十銭とは廉いものだという批評が出ている。根岸党員の著作としては、饗庭篁村「尋香到月瀬」、須藤南翠「万年鼻緒」、幸田露伴「すきなこと」、高橋太華「地獄洞」、宮崎三昧「尨犬」、幸堂得知「武者修行の稽古」が収録されている。

○『日本昔噺』

明治二十七年七月から二十九年八月にかけて、博文館から刊行された巌谷小波著の幼児文学叢書。四十五頁、全二十四冊。明治お伽噺の巨人巌谷小波の数ある業績の中でも、最も重要なものの一つとされる。小波が「おとぎ四十年」（木村定次郎編集・発行『還暦記念小波先生』（昭和五年）所収）に記すところによれば、初め全十二冊の予定であったものが、売れ行き好調のため途中で全二十四冊に変更され、また、当初一冊五円であった原稿料が、第十二編から十円に値上げされたという。

第一編は富岡永洗画『桃太郎』、第四編は饗庭篁村序『松山鏡』、第五編は森田思軒序『花咲爺』、第八編は幸田露伴序『俵藤太』、第九編は幸堂得知序『かちかち山』、第十四編は宮崎三昧序『兎と鰐』となっている。

○『太陽小説』

明治二十九年一月及び九月に博文館から刊行された小説集で、雑誌『太陽』に掲載された代表作を集めたもの。三百四十頁、二十二作品収録。第一編に饗庭篁村「従軍人夫」、須藤南翠「吾妻錦絵」、幸田露伴「新学士」、宮崎三昧「新袈裟物語」が、第二編に幸堂得知「心中女」が収録されている。

○『袖珍小説』

明治三十年一月から七月にかけて、博文館から刊行された文芸叢書。百七十頁、全十二冊。明治三十年前後の代表作家の短篇・小品・評論を主としたシリーズとされる。第一編は、饗庭篁村の四作品が収録された『つり的』、第二編は森田思軒の二作品が収録された『間一髪』、第三編は幸田露伴の七作品が収録された『僥倖』、第六編は幸堂得知の六作品が収録された『天製糸瓜の水』、第八編は須藤南翠『江戸自慢男一匹』となっている。

○『春陽文庫』

明治三十年六月から三十一年六月にかけて、春陽堂から刊行された小説叢書。百八十九頁、全十冊。尾崎紅葉が編集を担当した。第四編が須藤南翠『ぬれぎぬ』、第五編が宮崎三昧『花寄団吾』、第十編は饗庭篁村『いへ物語』となっている。

○『明治小説文庫』

明治三十年十二月から三十一年九月にかけて、博文館から刊行された小説叢書。三百二十頁、全十冊。博文館は先に明治維新以前の傑作を集めた『帝国文庫』を発刊したが、新たに「明治の新文壇に於ける帝国文庫」として刊行されたのが同叢書であるという。第一編に饗庭篁村「挽物細工」、宮崎三昧「仙術巌鑽盤」、森田思軒訳「歳尽」、第二編に須藤南翠「玉箒」、第三編に幸田露伴「封文」、第四編に饗庭篁村「当世金の草鞋」、第六編に幸堂得知「怪談二面」、須藤南翠「女塚」、第七編に宮崎三昧「新田小雪姫」、「花吹雪」、第九編に幸田露伴「是は是は」、第十編に幸堂得知「女歌舞伎」が収録されている。

○『青すだれ』

明治三十四年一月に春陽堂から刊行された小説・小品集。十三作品収録。かつて『新小説』誌上に掲載されたものの中から、当時の「文壇の元老」の作品を集めたものとされる（前掲の『日本近代文学大事典』第六巻）。饗庭篁村「蕪風」、幸堂得知「敵持親遺言」、須藤南翠「甘露」、森田思軒「羅馬人叢話」、宮崎三昧「遊戯庵骨董」、幸田露伴「聖賢の語を釈するにつきて」が収録されている。

三

根岸党が文壇の一派と目されるようになった事には、外側からみて彼らの文学作品に何等かの共通項があったことも大きく影響したと推定できる。明治二十四年五月発行の『日本評論』「文学一斑」欄には、以下のような記事が掲載されている。

○根岸党　其尊崇する処は近松巣林子建部綾足上田秋成柳亭種彦、其喜ぶ処

Hosei University Repository

は時代的院本及小説、其言ふ処は、駄洒落、其楽む処は酒、其嘲る処は半可通、其罵る処は俗物、其得意たる処は浮世画の鑑識、其珍襲する処は松花堂猩々坊亜流の筆跡、其任する処は明治の大家、其夢みる処は天明の大通世界。

記事の一々が党員全員に該当するわけではないが、同時代の文壇における根岸党に対するイメージは、上記のようなものであったろうと考えられる。その濃淡や媒体に違いはあるものの、江戸文学の影響を強く感じさせる作風が、彼らの文学上の共通項であった。

饗庭篁村の作風について徳田秋声述『明治小説文章変遷史』[2]には、「当時の所謂戯作者が八犬伝、梅暦、八笑人の余唾を舐る外に一歩を出られなかつたが、彼れ一人だけは深く西鶴其碩以下の諸作を渉猟し、元禄前後の随筆小説に塾し江島屋の文脈を伝へ得た故遂に紅葉露伴等の元禄文学の復興に際して、篁村宗とまで云はるる程自家の特色を発揮することが出来たのである」と記され、また、坪内逍遙は「軽妙洒脱な其磧脈の詞藻を駆使して、多少三馬に似て彼れよりも腕曲な諷刺冷嘲を、又幾らか一九に似て彼れよりも高雅な戯謔滑稽を、三面記事的の時代世相や時代人物を材料にして、縦横自在に発揮する一種の天才に於ては、当時全く比肩する者がなかった[3]」と振り返っている。人気の高さだけではなく、文学の質からしても、篁村は名実ともに根岸党のリーダーにふさわしい人物だったようだ。

朋誠堂喜三二・山東京伝らの流れをくみ、黄表紙的な作風の滑稽小説で人気を誇ったのは幸堂得知である。彼は天保十四年生れで篁村より一回り年上、根岸党文士の中では最年長の白髭の翁であった。江戸文芸通がそろう根岸党の中にあっても、得知の黄表紙好きは際立っており、黄表紙九種を模写し、おどけた「標註」を掲げた『大通世界』全三巻[4]がある他、博文館発行の帝国文庫『黄表紙百種』の校訂者としても知られる。得知自身の滑稽小説は、黄表紙的滑稽の妙と俳味とを持ち合わせた上品な作風で、他の追随を許さぬものであった。「得知君の滑稽は実に天下一品なり幸堂ぬしの諧謔は実に当世絶無なり[5]」という同時代評を裏書するように、明治二十年代には数多くの長編小説が『読売新聞』・『朝日新聞』紙上に連載され、単行本も相次いで刊行されている。

幸田露伴は得知より二回り年下、大家が揃う根岸党では最年少の「新米[6]」であった。露伴が新進作家の頃、西鶴調の文体による小説で人気を博したことはよく知られているが、その一方で、後の文学史で採り上げられるのはなぜか、「一口剣」や「五重塔」といった理想主義的・仏教的・哲学的な想念がみられる作品ばかりである。露伴が明治二十四年に「蒟蒻本目録」を発表していることなどからも、当時から相当の洒落本通であることが窺えるが、明治二十年代の「大珍話」・「当世外道の面」・「当世文反古」を始め、根岸党が消滅したとされる三十年代以降にも「珍饌会」・「屠蘇綺言」など、江戸戯作風の洒落気にみちた著作が数多くある。

このように根岸党には、江戸風文学の名手がそろっていた。明治二十年代において、紅葉や露伴による元禄調の文体からなる小説がもてはやされたことは一般に知られるところである。しかし、それは決して彼らの専売特許ではなかった。その時期はまた、江戸風の文学作品が大流行した時期であり、その中軸となったのが根岸党の文士たちによる江戸風文学であったのである。当時における江戸風文学の流行は、中途半端なものではなかったようだ。三島霜川は、その状況を次のように語っている。

文壇にも系統があつて、初期からかけてツイ先年頃までは地方色などゝ云ふ言葉すら聞かなかつたものだ。篁村だとか紅葉だとかを繞つて、すべての作家は皆江戸ッ子小説を作らねば流行らないと考へてゐた。東京に産れた作家は無論であるが、地方から出て来た多くの作家 —— 否、殆ど全部が、競ふて所謂、江戸通、江戸趣味の小説を作らんとした。

「地方色と作家」と題するこの文章が掲載されたのは、明治四十二年一月に発行された雑誌『新声』であるが、上記引用文によれば、その「ツイ先年」頃までは江戸風の文学が大流行していたという。江戸風の文学には、縁語、懸詞、駄洒落、地口等々を縦横に駆使し、東京方言、つまり江戸語を自由に操ることが不可欠であった。地方出身の作家にとってそれは大いに困難なことであり、同誌には他にも「何しろ江戸ッ児式文学の全盛を極めた時であつたからして、わざわざ苦しんでその流行の色に染まらんとしたものであつた、全くその時分は苦しかつた[7]」と上京当時の苦労を記した徳田秋声の文も寄せられている。

坪内逍遙の『小説神髄』や二葉亭四迷の『浮雲』は、日本近代文学の幕開けを

Hosei University Repository

告げる著作とされることが多く、それらが後の自然主義文学者たちに大きな影響を与えたことは周知の事実である。しかし一方で、前者の写実理論には、為永春水の人情本の影響が強く反映されており、後者には、江戸期の滑稽本・洒落本の影響が色濃く残っている事もまた事実である。にも拘わらず、これまでに編まれる文学史では、『小説神髄』や『浮雲』の持つリアリズムの方向性にばかり注目する傾向が極めて強く、それらが発表されてから十年以上の期間に渡り、意識的に江戸文学的な趣向を取り入れた文学作品が隆盛を極めていたことは黙殺されてきた。多くの文学史では、江戸文学の伝統を継承したものとしては、せいぜい仮名垣魯文や成島柳北らの作品が、「開化期の文学」という枠組みで取り上げられるにすぎない。

魯文や柳北の文学は、江戸期の戯作をほぼそのままに継承したものであり、明治二十年代、三十年代において流行した、江戸文学の趣向を意識的に取り入れた江戸風文学とは大きな違いがある。またそれと同時に、両者の間には、時期的な断絶もある。明治維新以降、激しい欧米化の潮流のなかで、魯文や柳北らの文学は次第に力を失っていった。その後、明治十年代後半までは、およそ文芸とは縁のない者たちによる欧米の文学の翻訳や政治小説ばかりが出版され、江戸期の戯作などを顧る者などは殆どいなかった。後に江戸期における最も偉大な作家の一人として、自然主義文学者たちには「近代文学の祖」と称される伊原西鶴ですら、明治前半期においては、すっかり忘れ去れた存在なのであった。そのような状況の中で、明治二十年前後、江戸文学を見直し、その一面を取り入れつつ新しい文学を造ろうという気運が高まり、それが二十年代、三十年代にかけて江戸風文学の大流行に繋がったのである。

四

江戸風文学の隆盛期は、旧幕臣や東京（江戸）出身者を中心に江戸復興の気運が高まった時期でもある。そして、それはまた、根岸党の活動期とも重なるのである。同時期の江戸復興の機運の高まりを示す事例を根岸党との関わりで挙げるならば以下のようなものがある。明治二十二年四月、旧幕臣や旧水戸藩士を中心として江戸会が発足し、六月には、江戸期の政治制度・文学・風俗・美術などを記録しようとして機関紙『江戸会雑誌』が創刊された。同誌は、八月に『江戸会誌』に改題されたが、改題後第一号には饗庭篁村が「祝辞」を寄せている。さらに、二十二年五月、『絵入朝野新聞』が『江戸新聞』に改題され、その第一号には篁村と須藤南翠とが改題を祝う文を寄せている。[8] また、明治二十三年六月、硯友社の機関紙『江戸むらさき』が創刊されたが、同誌は篁村・宮崎三昧・幸田露伴が社友であった。こうした江戸復興の諸潮流と根岸党との関わりについては、これまで問題にされてこなかったが、根岸党は東京（江戸）出身者、もしくは明治政府に反感を持つと思われる人物で構成されていたのだ。また、さらに言うならば自然主義文学が文壇を制覇する以前である明治三十年代までに活躍した作家は、東京出身者が殆んどを占めていたという事実も忘れてはならない。今後は、文学を含めた根岸党の活動全体、および明治二十年代、三十年代における江戸風文学の流行も、そうした潮流を背景に体系的に研究されるべきであろう。

※資料の引用に際して、漢字の旧字体を適宜新字体に改め、現在通行していない踊り字は使用せずに表記した。また、傍点やルビは省いた。

注

1 例えば露伴は「明治二十年前後の二文星」（『早稲田文学』第二三二号、大正一四年六月）において、須藤南翠に対しては「南翠氏」、饗庭篁村に対しては「篁村先生」と敬称を使い分けている。

2 大正三年五月、文学普及会。

3 「饗庭篁村君の追憶」、『演芸画報』、大正一一年八月。

4 明治二四年五月から一二月、春陽堂。草書交じりの毛筆の仮名文字による木版刷りの美本。活字本で読むことが出来ないためか、近代文学研究においては採り上げられたことのない作品である。第一巻の巻末には、二頁にわたり「海運橋角奈良屋正兵衛」（根岸党員の槙崎海運）による「諸国産紙大販広告」が掲載されている。

5 吉田香雨『当世作者評判記』、明治二四年二月、大華堂。

6 露伴は後に根岸党の思い出を楽しげに語り、「新米」時代の苦労を次のように述べている。「こんな連中の集りが私たちの先輩だったのだから、私たち新米は初めのほどどれ位悩まされたか知れなかった。第一に、洒落のやうな符牒のやうなその合言葉がわからなか

Hosei University Repository

つた。その上、一方は多少なりとも江戸の空気を知つてゐる人達だが此方は明治の初年さへろくろく知つてゐないので、年輩から言つてもまるで取組みにならなかつた。後にはさうでもなかつたが、当座は私なども小僧で野暮で、口出し一つ出来ずにゐた。だから後では天下に毒舌を振つた斎藤緑雨ほどの者でも、この連中からは田舎者扱ひにされたもので、まるで相手にはされなかつたものだつた。」(露伴「遅日雑話」、『文章倶楽部』第一三巻第三号、昭和三年三月)。

7　「作家の個性と地方色」

8　箕村はそこに「ケチな金づくで説を曲げたりヒケを取つても恥とせず髭に掴まる者多く江戸子の元気将に阻喪亡滅せんとするは業腹の沸る事なりしに」(「祝辞」)と記しており、薩長政府に対する反感が窺える。